特259
984

菅原時保禪師

碧巖錄講演

（其九）

始

將259
984

臨濟宗
建長寺派管長
菅原時保禪師

碧巖錄講演

（其九）

昭和十三年
帝國圖書館藏

碧巖錄提講

第十八則　忠國師無縫塔

「寒巖人不到、白雲常鬱鬱、細草作臥褥、青天爲被蓋、快活枕石頭、天地任變改」是は寒山の詩にして即寒山大士の無縫塔。

「あら樂や、虛空を家と住みなせば、心にかゝる造作も無し。」

と云ふ此の道歌は何人の作か不明であります。されど之は恁麽の道歌を作られた人の無縫塔であります。衲は衲で、毎日の行事が總て是れ無縫塔、――諸君は諸君で、日々の語

默、起、居、一、切が、無、縫、塔、で、あ、り、ま、す。本則に無縫塔がありますから、無縫塔につき思ひつきましたまゝ、一言述べた次第であります。

此の十八則にも圜悟禪師の垂示が欠けて居ります。故に從容錄八十五則にある萬松老人の垂示を前例に依り拜借して、聊か婆言を弄します。

◎垂　示

示衆云、有打破虛空底鉆鎚、擘開華岳底手段、始到元無縫罅、不見瑕痕處、且誰是恁麼人、』

讀　方

衆に示して曰く、虛空を打破する底の鉆鎚、華岳を擘開する底の手段有つて、始めて元縫罅無き處、瑕痕を見ざる處に到る。且く誰か是れ恁麼の人。』

簡單に示衆の字解を致します。「鉆鎚」鐵鎚と同樣、かねのつち、物を打破する道具。――「華岳」支那の山の名、例せば日本の富士山の如きもの。――「縫罅」縫ひ目、ハギメ、ツギメ。――心衣性服には縫罅無し。――「瑕痕」キズ、アト。心玉性珠には瑕痕無し。――

以上を一括して云はん。古人の語に、「洞山虛空を打破する底の鉆鎚有りと雖も要且つ補綴の針線無し。又、華岳連天の色を擘

開して黄河到海の聲を放出す。」とある。祖師門下の衲僧家たる機用は、鉆鎚を以て虚空を打破して、而して其の空裏に居らず、手段を以て華岳を擘開して、而して其の色相に礙へられず、と云ふ境界に到達しなければ、衲僧家と云ふ名目は有つても、其の實無きものである。(今は其名有つて其實無き者が多い。)苟も禪門に衣食する人は、大なり小なり打破の鉆鎚と擘開の手段が無ければ、所謂、衣架であり、飯嚢であり、――人間でなく、無論僧でなし。――諸君、知るや知らずや。虚空と云ふも、華岳と云ふも、決して外にはない、總て自己にある。正眼に見來れば、一切が迷のかたまり、悟のかたまり。――迷のかたまりは無論不可、悟のかたまりも亦不可、――不可なる點は迷悟共に同一であります。其の不可なる結晶物を木葉微塵に摧き、其の摧きたる粉末を拂ひ拂ひ拂ひ盡して大晴絶點になりたる處を、假りに名づけて、大死一番、絶後再生と云ふ。――此の境界が一度我が手に入ると、從來迷悟の縫罅も無く、畢竟凡聖の瑕痕も見ずと云ふに到達する。恁麽の田地に心歩性脚が喩へ一分でも二分でも踏着し得れば、何ともかとも言語に述べやうのないサツパリとした身心脱落、脱落身心となる。――此の一點塵汚の無い八面玲瓏の眞佳境に手引をする宗師家が極めて稀である。故に眞佳境に到達する學者も至つて少

い。誰か是れ恁麽の人、身心脱落、脱落身心、それは一体誰人である。――――回光返照すれば誰にでも知れる。然るに煩悩の虚空、妄想の華岳に遮られ、いつも〳〵對面千里、――――惜しいことであり殘念なことである。――――良師良友、正宗師正學者、其の機用の如何を知らんと欲し其の妙伎の如何を學ばんと欲せば、去つて本則に參ずべし。

◎本則

舉、肅宗皇帝問忠國師、百年後所須何物、國師云、與老僧作箇無縫塔、帝曰、請師塔樣、國師良久云、會麽、帝曰、不會、國師云、吾有付法弟子耽源、却諳此事、請詔問之、國師遷化後、帝詔耽源問此意如何、源云、

湘之南、潭之北、(雪竇著語云、獨掌不浪鳴)
中有黄金充一國、(雪竇著語云、山形拄杖子)
無影樹下合同船、(雪竇著語云、海晏河清)
瑠璃殿上無知識、(雪竇著語云、拈了也)』

讀方

舉す。肅宗皇帝、忠國師に問ふ、「百年の後、須ふる所何物ぞ。」國師云く、「老僧が與に、箇の無縫塔を作れ。」帝曰く、「師に塔樣を請ふ。」國師良久して云く、「會すや。」帝曰く、「不會。」國師云く、「吾に付法の弟子耽源なるものあり、却て此事

を諳ず、請ふ詔して之に問へ。」國師遷化の後、帝、耽源に詔して此意如何と問ふ。源云く、「湘の南、潭の北。(雪竇著語して云く、獨掌浪に鳴らず。)中に黄金有つて一國に充つ。(雪竇著語して曰く、山形の拄杖子。)無影樹下の合同船。(雪竇著語して曰く、海晏河清。)瑠璃殿上に知識無し。(雪竇著語して曰く、拈了也。)」

本則の字解を簡單に致しませう。

「肅宗皇帝」此の帝は唐の高祖から七代目、此の帝は慧忠國師より十二年前に崩ぜられました。其の次の天子は代宗、此の帝が忠國師に參ぜられたと云ふ事蹟がありますから、肅宗皇帝は

代宗皇帝のまちがひ。――――されど、今用ひて居ります碧巖錄には肅宗皇帝となつて居りますから、肅宗皇帝として置いても宗意には別段差閊へはありません。故にそのまゝにして措きます。』――「忠國師」南陽の慧忠國師、六祖大鑑禪師の法嗣で有名な禪僧、南陽の白崖山に住して山を下らざること四十年とある。(恁麽の長年月、聖胎長養なされた。)肅宗、其の道譽を聞いて詔りして帝城に迎へ、待つに師の禮を以てす。(或人は云ふ。肅宗、代宗、共に佛敎を信じなければならぬ深き所以がある。又慧忠國師は如何にも純然たる眞箇の禪僧の樣に見えるが、其の實、大なる山師、日本の道鏡に類似して居ると。)初め千福寺

西禪院に居り、代宗立つに及んで長安の光宅寺に移り、説法十六年、大曆十年十二月遷化、大證禪師と謚すとある。右の次第に依れば肅宗皇帝も忠國師を信仰しておいでであるが、本則の問答は代宗皇帝であることは確實であります。――「百年後」死後のこと。傳燈錄には「師滅度後」とあるさうな。百年後の方が滅度後より普通の人には早わかりが致します。故に百年後と云うたもの。――「所須何物」意味を云へば、「あとに遺された弟子どもは何をもつてあなたを記念したものでありませうか。」である、と井上君はお敎へなされた。單に何かお所望は無きやと云ふよりは井上君の説が御尤もに思はるゝ。――

「無縫塔」念入に二重の塔だの三重の塔だのと云ふ樣な美事なものは御無用、記念の目標に土饅頭の墳墓で澤山。』由來、塔には大別して二樣の構造法があります。其の一は、木材、石材、金屬、――其の二は、卵形塔で土饅頭形、――委細は佛敎建築學を研究すべし、と井上君が云うて居る。それに相違ない。』――「請師塔樣」無縫塔とは如何なる形のものか、又何を材料として構造すべきものか、帝に於ては全然無經驗である。其の設計、――其の圖面、――お見せください。――「良久」默と云へば語に對することになる。故に良久。無論、語に非ず、又默に非ず、語默を超越した處。是を强ひて良久と云へば云ふ

もの〻、眞箇の良久は事實良久の境界を手に入れねば知れぬ。

――約臂黃金寬一寸、逢人猶道不相思』――猶把琵琶半遮面、不令人見轉風流、』――良久、――以上が無縫塔の略圖、――設計の一部である。――「不會」讀んで字の如く不會、わからぬ、解せぬ、胸に落ちぬ。――良久の圖面、良久の設計、その樣な圖面、設計では、無縫塔そのもの〻形体は忠國師以外の人には實際不會。――帝の不會、可謂、實頭と。――帝としては其の不會が無縫塔の本體實物である。――圖面や設計に用はない。白隱禪師は帝の不會に、壯觀々々と著語して居らる〻。帝以て安心すべし。――「耽源」吉州の耽源山の寺に住居された應眞禪師のこと。久しく忠國師の侍者をして居られた。逸話の一を擧すれば、仰山、耽源に問ふ、「如何出得井中人。」耽源云く、「咄、痴漢、誰在井中。」と。――仰山、後に大悟して云く、「我在耽源處得体、潙山處得用。」と歡喜して居られた。可知、耽源禪師の其の人となりを。』――「遷化」僧侶の死したることを云ひあらはす別名、此の外に順世、涅槃、圓寂、滅度、示寂等種々あります。遷化とは敎化の場所を他に遷すと云ふ意味。故に普通、僧の死には用ひず、正師家の死に使用する。處が今日は普通僧の死に遷化を用ひます。それは越權と云ふべし。――分を知らずと云ふべし。――「此意如

何」云ふまでもなし、良久そのもの、無縫塔、それ、未了の公案、——無縫塔、その意、それがわかれば良久もわかる。——「湘之南、潭之北」云ひ換へれば、「歐の西、亞の東」——南極の北、北極の南。——三十三天上より下、奈落の根底より上。——障子の左、唐紙の右。——米の飯と太陽は何れの處へ往くもある。——人間到處有二青山一。——殊更に人手を借りて無縫塔を製造する必用はあるまい。看よ自然の無縫塔は文質彬々。「處々全眞、——到處稱尊。」「左轉右轉、——塡溝塞壑。」——「活潑潑地、——拂蹤滅跡。」——「中有二黃金一充二一國一」塵々刹々是黃金、天も黃金、地も黃金、山も黃金、川も黃金、人も黃金、我も黃金、畢竟世界は黃金の一塊團。——聞かずや一靈皮袋、皮袋一靈、身心共に是れ黃金。——色即是空、空即是色、色空共に是れ黃金。——煩惱即菩提、菩提即煩惱、煩惱菩提共に是れ黃金。——天地と我と同根、萬物我と一体、天地と我、萬物と我、共に是れ黃金。——宜なるかな、一葉一釋迦、一枝一彌勒、』一華開いて天下の春、一葉落ちて宇宙の秋。』——可貴、純金の無縫塔、乞食は一枚のわらむしろが黃金世界。——諸君の世界は銅か鐵か、將亦何物か。——「無影樹下合同船」影ない樹とは如何なる樹か。此の樹は無陰陽の地にのみ繁榮する。意味は自己無きこと。自己無け

れば天地も無し。云ふ勿れ一切皆空と。清和の當体、融合の有様、それが無影樹である。面白や世は一隻の乘合船、歐人も亞人も、白色人も黄色人も、男も女も、貴も賤も、富も貧も、知も愚も、犬も猫も、蟻も蠅も、虱も蚤も、總ての一切が安危を共にし苦樂を共にし、而して努力、而して耐忍しつゝ、生死の荒海を乘りきるのであります。』油斷は出來ぬ、油斷は大敵、その油斷は和合を破る、清和を無視する、融合を没却する。――諸君は如何に、清和か不清和か。――融合か不融合か。――無縫塔に縫罅を生ずること勿れ。――「瑠璃殿上無知識」無影樹下の合同船が彼の岸に到着すると、そこに極樂世界があり、内外玲

瓏、玉の臺があり彌陀如來が在します。(強ひて彼岸に到らずとも、極樂もあれば彌陀も居る。)それは「瑠璃殿上有知識」――悟りそのもの、涅槃そのもの、妙心そのもの、極樂淨土そのものに執着してをる。是は是なりと雖も眞の是に非ず。卑賤墮に對する尊貴墮で、墮する所以は同一である。今は瑠璃殿も知識も、清風拂明月、明月拂清風で拂ひ拂ひ盡して瑠璃殿も知識も打成一片の無縫塔。――到得歸來無別事、蘆山煙雨浙江潮』

――耽源の詩に雪竇禪師の着語。

「湘之南、潭之北、」此の下に、「獨掌不浪鳴」片手では音は出ぬ。』鐘が鳴るか、撞木が鳴るか。鐘のみでは鳴らぬ、撞木の

みでも鳴らず、鐘と撞木で鳴る。』南山に雲を起せば北山に雨がふる。湘は潭に、潭は湘に、相依り相對して玆に始めて湘の湘たる面目が現じ、潭の潭たる本領が露はる。如何なる日下開山でも獨り角力は見てが無い。

「中有黃金充一國」此の下に、「山形拄杖子、」拄杖子を識得すれば一生參學の事了りぬ、と古人は拄杖子を尊重してをらるる。蓮華庵主は、「柳樑橫擔不顧人、直入千峰萬峰去、」――信玄公は死ぬ時に、「大抵還他肌骨好、不塗紅粉自風流、」と吟じたが、是は信玄公の拄杖子。――或時は拄杖子となり、或時は無縫塔となる。――直心是れ道場、――歩々是れ道

場。――直心是れ無縫塔、――歩々是れ拄杖子。――なれ〳〵拄杖子に、なれ〳〵無縫塔に。――山形は山から採り出した其のまゝ。自然がよし天然がよし。紅粉を塗るな、漆をつけるな。――娘生の面のまゝがよい。

「無影樹下合同船、」此の下に、「海晏河清、」いかにも性海禪河はいつも〳〵晏清であります。四海浪平龍睡穩、九天雲靜鶴飛高。』――五日一風、十日一雨。雲門禪師の所謂、日々是好日。――生死あるまゝ、苦樂あるまゝ、榮枯あるまゝ、昇沈あるまゝ、柳、櫻をこきまぜて。』――雪や氷とへだつれど。』――花ぞ錦なりけり。』――谷川の水。』――

「瑠璃殿上無知識」此の下に、「拈了也、」つきだした無縫塔、
拂ひ拔けた無縫塔、――拈了也、――拈了也、――諸
君、おわかりになりましたか。おわかりになれば拈了也。
――おわかりにならなくとも拈了也。』――本則を一括
して左に閑言語を弄します。
古人の句に、僧となつては須く山谷に居すべし、と云ふのが
あります。殊に禪僧は山谷に聖胎長養して居れば本分であり無
事である。越格の偉僧、拔群の傑僧であれば格別、凡僧、愚僧
は山谷に居して曆日を忘るゝがよい。――慧忠國師の如きは
既に四十年間、白雲堆裏に清居して聖胎長養なされた。其の後、

山を下り人間界に出で、灰頭土面、以て爲人度生なさる。是が
慧忠國師の國師たる本分。肅宗、代宗の二朝に仕へ、(歸依信仰
され)王者の師となり、頗る幅をきかせて居られた。――或
日、老病で床に臥して居らるゝ國師の處へ、おそれ多くも肅宗
皇帝、(實は代宗皇帝、)玉歩をおはこびになつて、「如何がであ
る。病氣は多少なりと快方に向きましたか。老体のことである
から壯年時代とちがふ。充分養生をするがよろしい。併し老少
不定、世は無常、萬一、萬々一、貴僧が示寂なさることがあつ
たら、貴僧の記念に何か所望はありませんか。」と有難い御下
命である。尋常一樣の凡僧ならば、(衲の如き俗僧であるなら、)

待つて居りました、と腹の中で云ひつゝ、「折角の御芳志、遠慮致すは却て無禮、御下命に隨ひ正直に申上げます。二三百萬兩御下賜を。」と云ふ處。――――忠國師は流石に王者の師だけあつて、「眼高看不到黄金」――――僅かに一箇の無縫塔を作られたしと懇望。――――是れには皇帝、聊か面喰ひの態。されど國師の敎を受けて居らるゝだけあつて、然らば其の塔樣、圖面なり設計なり、お示しください。さすれば速かに建立致しませう。忠國師は慈悲、落草して良久、――――云く、會すや。おわかりになりましたか。(國師も國師であるが、皇帝も皇帝だ。「相逢不下馬、各自走前程」と云ふ作略も無ければ、臥龍纔奮迅、丹鳳便翺翔、と云ふ禪機も無い。――――)帝は正直だ。聊かも外面を飾らず、曰く、不會。わかりません。「知らざるを知らずとせよ、是れ知るなり、と云ふことがあるから、帝の不會は不會と會したのである。」などゝ云ふ强辯家がありません。それは眞箇の詭辯家で、取るに足りません。』陛下、おわかりになりませねば、私の付法の弟子の應眞が耽源山に居りますから、あれをお招きになつてお尋ねください。あれは無縫塔の意味及び狀態をよく存じて居ります。――――國師の遷化された後、皇帝が耽源山の應眞禪師を呼んで例の無縫塔のことをお尋ねになりました。應眞欽んで奉答申し上げました。それが一首の詩であります。云く、

湘之南、潭之北、時間も空間も、どこもかも。——
中有黄金充一國、黄金より外には何ものもなし。——
神のお國だ、佛の都だ。——
無影樹下合同船、草木國土悉皆成佛、明々百草頭、明々祖師面。——親疎、遠近、上下、貴賤、貧富等の區別はない、差別はない。——同權利、——同資格。——佛にあつても、凡夫にあつても、九々八十一。——
瑠璃殿上無知識、畢竟、瑠璃殿も知識も無しく、總て是れ一箇の無縫塔。——無縫塔が、立つ

たり坐つたり、——呑んだり喰つたり、——泣いたり笑つたり。——云ふ勿れ我れ解せりと。易分霜裏粉、難辨雪中梅、要は實參、要は實悟。——

雪竇禪師又是れ宗師家。虚空を打破する鉆鎚、華岳を擘開する手段あり。耽源の無縫塔に着語して云く、「獨掌不浪鳴」されど大聲を發する獨掌もある。華岳を擘開する其の手、それが獨掌で鳴る、鳴らして見せようか。——泣露千般草、吟風一樣松、』——「山形拄杖子」毛、巨海を呑み、芥に須彌を入る。——一本の此の楊子、盡三千大千世界。——「海晏河清」

白浪滔天、洪波震地、――――海晏河清と是れ同か是れ別か、――別なるときは雲在嶺頭閑不徹、――同なるときは水流磵下太忙生、』――「拈了也」以上是れで終結、――拈了也。――盡十方法界總て是れ無縫塔。』――瑠璃殿、――知識などと云ふ異體のものはどこにも無い。――是れぞ如來の正法、――是れぞ祖師の端的。――畢竟如何、「要知山上路、須是去來人。」

◎頌

無縫塔、見還難、澄潭不許蒼龍蟠、層落落、影團團、千古萬古與人看、』

讀方

無縫塔、見ること還た難し。澄潭には蒼龍の蟠ることを許さず。層落々、影團々、千古萬古、人と與に看ん。』

頌につき一言申し上げます。「澄潭不許蒼龍蟠」澄潭は慧忠國師其の人の胸中、光風霽月、點滴も塵埃とすべき妄想なきことを表示したもの。』蒼龍は、利慾、名譽、それらに類似した俗臭野心、そのものに比す。』或一說には、水淨ければ魚棲まず、徹底的澄みきつた潭水には活龍は居住せず。「俊鳥不栖林、活龍不滯水、」で、第一義諦とか向上の一路とか聲前の一句とか云ふ澄潭には、慧忠國師の如き活龍は死在して居らぬ、

と云ふ。――納は此の說に共鳴します。――「落々」落々如石と云ふ句がある。層落々は石の重なつて居る貌、どこに石が重なつて居る。――「團々」月團々、又は團々如明月、又は荷葉團々の團々で、無縫塔の影を云うたものか。――形正しければ影直し、形が團ければ影もまた團い。――お互の影は團か、四角か、將亦長いか短いか。――影を逐うて形を忘るゝ勿れ。――更に以上を一括して。

此の頌は、讀んで字の如く、讀みさへすれば何人にも分ります。されど只今までの例に依り聊か提講を試みませう。此の頌の作りは亦一體で、三言四句七言二句の歌であります。』無縫塔、是が慧忠國師の全身、露堂々、元より無縫塔は露堂々である。それを殊更に無縫塔と云うて投げ出されたのは慧忠國師の老婆禪、――其の老婆禪を老婆禪と知りつゝ無縫塔と吟出なされし雪竇禪師は慧忠國師以上の老婆禪。――此の老婆禪も時と處に依りては向上禪となる。故に老婆禪々々と云うて一概に放下すべきでない。――或人は、宇宙萬象の本體を無縫塔と云ふ一句に拈出されたが、殘念なことには、已に言句に出たゞけ、はや縫目がついた、と云はるゝが、それは、さう云はるゝお人の縫目で、眞箇の無縫塔には徹頭徹尾縫目は無い。如何に徹頭徹尾縫目が無いか。云く、左之右之、是れ無縫塔、――

一出一入是れ無縫塔、――一笑一泣是れ無縫塔、――語默動靜是れ無縫塔、――喫茶喫飯是れ無縫塔、――無縫塔、――無縫塔、――總てが無縫塔、――一切が無縫塔。

――然るに見んとすれば見えず、聞かんとすれば聞えず、採らんとすれば採れず、知らんとすれば知れず、所謂「白雲堆裏不見白雲、流水聲裡不聞流水」――無縫塔は、目に一ばい、耳に一ばい、鼻に一ばい、口に一ばい、手にも足にも前にも後にも一ばい〳〵。澄潭不許蒼龍蟠で、無縫塔の文字や言句に拘泥して、無縫塔そのものを見ようだの知らうだのと妄想をかきまはして居ては、死んだ子を待つと同じで、何年經つても見ることも知ることも出來ぬ。古人云く、象罔到時光燦爛、離婁行處浪滔天、と。眞に然り。煙のなき火事を盲人が見つけ、足のなき人が駈けつけ、手のなき人が揉み消した、と云ふことがある。宜なるかな象罔到時光燦爛、――聊かでも一處に腰をかけたり尻を据ゑたら、焦芽敗種、世のすたれもの、世の邪魔もの。――活動する處に、奮起する處に、努力する處に、勇猛する處に、無縫塔が層落々、――影團々。――見るに任せ、聞くに任せ、執るに任せ、味ふに任せ、樂しむに任す。――天下は天下の天下、一人の決して私すべきものに非ず。無縫塔も亦復然り。一人の無縫塔に非ず、天下衆人と共にすべき無縫塔。

――雪竇禪師曰く、千古萬古與人看、と。慧忠國師以前は無論、慧忠國師當時、今日に及び、以後も、依然として無縫塔そのものは嚴然として居る。大地山河不覆藏――萬象裡獨露身。更に一句を添へて置きます。竿頭絲線從君弄不犯清波意自殊。』

――垂示に萬松老人を煩しましたから、序でに頌も天童禪師に御手數をかけます。諸君には太だ御迷惑樣、暫くの間御辛抱を願ひます。天童禪師の頌に曰く、

孤迥々、圓陀々、眼力盡處高峨々、月落潭空夜色重、雲收山瘦秋容多、八卦位正、五行氣和、身先在裏見來麽、南陽父子兮却似知有、西竺佛祖兮無如何』

讀方

孤迥々、圓陀々、眼力盡くる處、高うして峨々たり。月落ち潭空しうして夜色重し。雲收まり山瘦せて秋容多し。八卦位正しく、五行氣和す。身先づ裏に在り見來るや。南陽の父子却つて有ることを知るに似たり。西竺の佛祖、如何ともすること無し。』

一應字句につき說明。――「孤迥々」遼遠の貌。比倫の無き樣子。古句に、峭巍々孤迥々、と云ふのがあります。蓋し其の句より出でしならん。お互が元來孤迥々である。――「圓陀々」マンマルイ形容詞、無縫塔そのもの。――圓と

云うても圓いでなし、菱角尖々尖似錐、そのまゝが圓陀々である。信心銘にある無缺無餘、是れが眞箇の圓陀々である。——「眼力盡處」親から頂戴した肉眼では及びもない。智慧の眼、禪定の力、その眼とその力が必用々々。——「月落云々」是は黑漫々地の處。佛眼、看れども看えず。——「雲收云々」是は皮膚脱落の處。法身、比すれども及ばず。——「八卦」乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤。——「五行」木、火、土、金、水。——以上の八卦五行そのものゝ順逆如何によつて天地の吉凶が定まる。畢竟するに八卦五行は自己の外にあるなし。天地の吉凶は自己の吉凶、自己の順逆が八卦五行の順逆。知るべし一切自己なることを。——「身先在裏」古人、面前の石を指して云く、「禪は心外無法と云ふ。此の石、心の中か、中と云はゞ隨分邪魔であらう。心の外と云はゞ禪の意旨に背く云々。」とある。身先在裏と云ふ裏とは何れの處なるぞ。——こゝだ〳〵、それ〳〵それ〳〵そこだ。諸君おわかりか。——「南陽父子」慧忠國師と應眞禪師のこと。『父は子の爲にかくし、子は父の爲にかくす。直きこと其の中にあり。されど親知らず子知らず。是れを父子唱和と云ふ。諸君の間は如何に。蓋し他人の知る處に非ず。——他人の知るを許さず。——「西竺佛祖」釋迦如來、達磨大師、西天二十八の佛祖のこと。——恁麽の佛祖、現今何れ

の處にお出でゞある。諸君御承知か。――　知らんと要せば十萬八千。――

焉ぞ隱さんや、焉ぞ隱さんや。其の人の目瞳子を見れば、其の人の性質は洞然明白、隱すに道なし、と云ふ。慧忠國師無縫塔の本則を頌じられた頌に依つて見れば、雪竇禪師、天童禪師、兩禪師の禪的境界は焉ぞ隱さんや。隱せば愈々あらはるゝを如何せん。――　一は藍より出でゝ藍より青く、――　一は氷より出でゝ氷より寒し。――　雪竇禪師は無縫塔より頌じ始めて、人と與に看るで結び、』天童禪師は孤迥々より吟じて、佛祖も奈何ともなしがたしで口を閉ぢらる。――　一箇は瓠子の曲つて

彎々たるに似て短く、一箇は冬瓜の直くして儱侗たるに似て長し。――　雪竇禪師の頌は既に提講し了れり。是より天童禪師の頌につき例の不說の說を陳述致しませう。

無縫塔そのもの、其の高き計るべからず、其の廣き窮むべからず。實に孤迥々にして圓陀々である。眼を以て見るべからず、力を以て動かすべからず。眼力の盡きたる處、更に高くして峨々たり。力量の及ばざる處、愈々廣くして蕩々たり。强ひて形容し物色すれば、月落潭空夜色重。――　それは、風吹不入、水洒不著、佛祖と雖も手を拱するのみ。――　見んと欲すれば却つて見えず、取らんと欲すれば却つて取れぬ。聞かずや、玉

を探らんと欲せば須く波をしづむべし。波しづまれば玉は自然に我れに歸す。――　無縫塔そのものは、寒雲籠雪夕陽重、山月照梅夜色清、で、其の重さ其の清さ如何と問はるれば、清きが故に清し、重きが故に重し、と答ふるのみ。――　看るべし知るべし。天地の生成、日月の運行は、八卦位正しく五行順和であれば、所謂、五日一風、十日一雨。雨、土塊をうたず、風、枝を鳴らさず。中和を致して天地位し萬物育す。之是の八面玲瓏十方通暢のまゝが無縫塔。――　お互が之の無縫塔の中に居りながら相逢うて相知らず、共に語つて名を知らず、――　若し知つたら無縫塔は消滅。――　相逢うて相知らず、そこに嚴

然と無縫塔が現出。』帽子の頭にあることの知れるは帽子が頭と一致せざるが爲め、靴の足にあることの知れるは靴が足と一致せざるが爲め。――　帽子が頭と一致すれば帽子を頂いて帽子あることを知らず、靴が足と一致すれば靴を穿いて靴あることを忘るゝ。靴あるを忘るゝは靴と足と同一體、帽子あることを知らざるは帽子と頭と同一體。眞箇の無縫塔は、行住坐臥、左轉右轉しつゝ、自己と不二一體になつて居る。――　諸君は如何でありますか。――　南陽父子、西竺佛祖云々の二句は天童禪師の見識、――　禪機。衲の見識、――　禪機、――　と角力して諸君にお見せ申しませう。素人角力も亦一興。勝敗は時

の運、否、力の多少。――天童禪師は天下の横綱、衲は一寺院の禪かつぎ、元より比較にはなりません。其の比較を眼中に置かざる處に、禪僧の見識、――禪僧の禪機がある。

天童禪師曰く、南陽父子は多少無縫塔の何ものたるを知るに似たり、と聊か許し、西竺佛祖は、全然無縫塔の何ものたるを知るなし、と嚴しく抑へられた。之是が天童禪師の無縫塔。

曇華云く、天童禪師は、可憐、「只知錐頭利、不知鑿頭方」何が故ぞ、「劍握甑人手、魚在謝郎船」――之是は曇華の無縫塔。――

請ふ、諸君、優劣、勝敗、彼れか此れか軍扇を揚げて見たまへ。軍扇を揚ぐる處に諸君の無縫塔が流露致します。天台華頂秀、南岳石橋高。』――

楠公の無縫塔は纔に一片の石、黄門公、題して、嗚呼忠臣楠氏之墓、と。――其の小なるものが却つて全世界の大。――足利尊氏の無縫塔は、建立すると破壞され、建立すると破壞され、――見るに今は無縫塔の跡だに無し。是は足利尊氏の無縫塔。圓覺寺開山無學祖元禪師の無縫塔は舍利となつて現存す。――建長寺開山道隆大覺禪師の無縫塔は雲烟となつて消散せり。

季札は、吳の國王壽夢の末子。或時、北方の國に使に行く。

其の途中、徐と云ふ小國に立寄り、其の君を訪問せしに、徐君は、季札の帶びて居る劍を見て大變氣に入り、如何にも其れが欲しさうであつたが、口に出して何とも云はれなかつた。季札は心にそれを悟りました。されど、今北方に使する道で其の劍を進呈すると云ふことは出來ぬ。そのまゝ徐の國を過ぎ去り、使命を果し歸り道、徐の國へ來て國君を訪問致しますと、徐君は既に崩御。――季札、悲嘆窮まりなし。直に徐君の墓に參詣し、腰に帶びたる劍を解き墓の傍にかけて、吳の國に歸られました。其の時お供をして居つた者が其の無駄である事を忠言しますと、季札曰く、自分は最初からあの劍を徐の君に奉る心算であつた。今、徐君が死なれたからと云うて、私の心は變るものでない。――之是の前約後踏、それぞれが季札の無縫塔。――恁麽の無縫塔、實に千古不磨。――而して幾萬幾億の約束に違背し前約を踏まざる人の御手本であります。――至囑々々。

（以上昭和十二年四月十日講演）

第十九則　俱胝只竪一指

萬松老人は從容錄、俱胝一指頭の禪に示衆して曰く、「一聞千悟、一解千從、上士一決一切了、中下多聞多不信、」と云うて居られます。如何にも語り得て好し、辯じ得て妙であります。別に上士と云うて特別に上士は無い。心外に向つて法を求めず、自己に向つて照顧する、之是が上士。お互が上士にならざるべからず。――天童禪師は俱胝一指頭の禪を頌じて曰く、俱胝老子指頭禪、三十年來用不殘、信有道人方外術、了無俗物眼前看。所得甚簡、施設彌寬云々。――衲は深く愛

す、所得甚簡、施設彌寬、と云ふ之是の語を。――複雜の今日、特に所得甚簡、施設彌寬なることを要す。

◎垂示

垂示云、一塵擧大地收、一花開世界起、只如塵未擧、花未開時、如何着眼、所以道、如斬一綟絲、一斬一切斬、如染一綟絲、一染一切染、只如今便將葛藤截斷、運出自己家珍、高低普應、前後無差、各各現成、儻或未然、看取下文、』

讀方

垂示に云く、一塵擧れば大地收まり、一花開けば世界起る。只、塵未だ擧らず、花未だ開かざる時の如きは、如何か着眼せん。

所以に道ふ、一緑絲を斬るに、一斬一切斬なるが如く、一緑絲を染むるに、一染一切染なるが如し、と。只如今便ち將に葛藤を截斷して、自己の家珍を運出すれば、高低普く應じ、前後差ふこと無く、各々現成せん。儻し或は未だ然らざらん、下文を看取せよ。』

「一塵、一花」一塵必ずしも一塵に非ず、一花必ずしも一花に非ず。』一塵、一花、之是の一、一即萬、萬即一。――一句明々該萬象――一氣不言含有象――一粒粟中藏世界――一點梅花藥、三千世界香。――その小なる一、その微なる一、其のものゝ上に於て大なる活動をなす。云ふ勿れ禪機と。――

自然の大道、必然の眞理。――左に類句を兩三擧揚して見ませう。一毛頭上定乾坤。』――一葉翻空天下秋。』――一花開知天下春。』――一金成萬器萬器成一金。』――一毫穿衆穴衆穴一毫收。』――一毫端現寶王刹微塵裏轉大法輪。』――一物に全宇宙を含み、一動に盡乾坤を搖がす。――事實お互が毎日々々なしつゝある總てが、盡乾坤を搖がし、全宇宙を含んで居る。――知るや知らずや。――「塵未擧、花未開」天地の未だ闢けざる以前、――父母の未だ産まざる其の前、――闇の夜に鳴かぬ鴉、――劫前未兆、――混沌未分。――果して恁麽の處有りや。有らば未擧、未開に非ず、既擧、

既開である。既開と未開と、既擧と未擧。是れ同か、是れ別か。別と云ふもよし、同と云ふもよし。――「如何着眼」未開以前に向つて宇宙の本體を達觀し、未生以前に於て自己の面目を識得する。それが拔群の漢にして越格の人、その人を指して「閃電機」、「用霹靂手」と云ふ。恁麽の處に着眼すべし、然らざれば不可なり。――「一絯絲」「一くゝり」「一たば」妄想の一念。』妄想の一念とは、自己を認むる一塵、――一念々起の一花、――只箇一點無明焰、――首にかけたる人形箱。――「一斬一切斬」快刀亂麻、――一拳々倒黃鶴樓、一趨々翻鸚鵡洲。』――自己を認むる一絯絲を斬れば、即時に八萬四千の煩惱は

斬れる。一指頭の自己を忘ずる時、八萬四千の法門が顯現す。』聞かずや、一所透れば千所萬所一時に透り、一機明かなれば千機萬機一時に明かなり、と云ふことを。』上士一決して一切了する底。――「將葛藤截斷」是は葛藤と截斷と顚倒して居る、是を倒句法と云ふ。別に深意あるに非ず。葛藤を以て一指頭の禪とする人もあります。――「自己家珍」本來の自己、自己の本體、所謂父母未生以前の面目。知るべし、宇宙即自己の家珍、――無我即大我。――作麽生か自己の家珍、却將錦樣鶯花地、變作元暉水墨圖。――變天地爲黃金、攪長河爲酥酪。――忘るゝ勿れ、豆種不生麻麥、草根不產松椿。――「高低普應、

前後無差」高低自在、――前後自由。――是法平等、無有高下。高處は高平、低處は低平。――天は高く地は低し。――應無所住、而生其心。――熱に會つては熱、寒に會つては寒。――飢ゑては飯、困じては眠る。――自己を忘じ自己を認めざれば、一切時、一切處に於て、圓融無礙、――明暗雙々。――豈快ならずや。――「各々現成」無明實性即佛性、幻化空身即法身、――八解六通心地印す。長者は長、短者は短、甲も乙も現在のまゝ、智者も愚者も、貧富老若、草木國土、何れもそのまゝ、成佛の端的、活祖の當體である。――然るに何を苦しんで下劣の漢となる。――「儻或未然」是れには二樣の解釋があります。一は、「もし或は未だしからずんば、」「まだ分らぬならば、」二は、「フトすると、お前達はまだ葛藤を截斷して自己の家珍を運出すると云ふ所まで行つて居ないであらう。」是は井上君の御意見である。何れにしても要は下文を看取せよと云ふことになる。

佛敎特に禪宗哲學には深々の理論を含蓄した句が澤山ある。「毛呑巨海、芥納須彌。」――「袖中藏日月、掌內握乾坤。」――「眉毛觸碎須彌、鼻孔飲乾大海。」――以上は衲が記憶にある其の一部の更に其の亦一部である。既に擧一明三底の諸君であるから、僅か二三を拈出した句で、大道の本領、眞理の實

體、其の輕重、深淺、廣狹等、悉く御承知なされたこと、信じます。――事實一點の塵埃を擧揚すれば(擧揚せずとも)、その塵埃の中に宇宙の全部が包含され、一片の花が開けば、其の中に全世界の花が開き全世界の春が動搖して居る。』恁麽の道理は、敢て禪宗哲學を研究しなくとも常識のあるお方である以上は、一聞千悟でありませう。――更に進一歩して、塵未だ擧せず、花未だ開かざる以前、――朕兆未分の時、母子未分の際、宇宙は如何なるものか、――自己は如何なるものか。――此の宇宙の妙用、此の自己の本體、それ、それを達觀せざるべからず、識得せざるべからず。――如何に着眼すべきや。

諸君に於ては既に業に着眼點が定まりましたか。智、目、行、足、以て、淸、淨、地、に、至、る、で、着眼點が動搖して居つては、足を淸淨地に運ばれません。――所以道、一斬一切斬、――一染一切染。――事實その通り、宇宙の事々物々は一把の絲、一が萬、萬が一、相關係し相連續、不即不離。故に一塵を擧すれば大地が收まり、一花が開けば世界が起る。――認識不足のお方は、起つた世界、動いた大地に誘引され、是非なき處に是非を、――善惡なき處に善惡を、――正邪なき處に正邪を、――己、れ、に、迷、う、て、物、を、逐、う、て、居、る、が、常、で、ある。――何人でも、是非、善惡、正邪等の閑葛藤を一斬一切斬して自己本具の無我大

我を運出するならば、舊時の夢は一時に覺醒し、高低普く應じ自由自在、――前後差ふ無く七縱八横、――之是が各自本來の面目、之是が各自の眞實法體である。近來傳得安心法、萬岳松風枕上聞、――以上の老婆言、諸君おわかりになりましたでありませう。若し一、萬岳の松風枕上に聞くと云ふ大安心を得ざるお方があるかも知れぬ。あつたら、下文の本則一指頭禪に參ずべし。參ぜざるべからず。――

◎本則

舉、俱胝和尚、凡有所問、只竪一指。

讀方

舉す、俱胝和尚、凡そ問はるゝこと有らば、只一指を竪つ。」

俱胝和尚の法脈を左に附記して措きます。

馬祖道一
- 百丈懷海
- 南泉普願
- 大梅法常――杭州天龍――俱胝和尚（新羅迦智）
- 鹽官齊安
- 佛光如滿

俱胝和尚は、最初婺州金華山に住し、入寂の地は黃檗山萬福寺の近傍で靈石山俱胝寺と云ふことである。本名を呼ばず、常に佛母陀羅尼を讀誦するが故に俱胝と云ふ。俱胝が本名の如くに

なりぬ。――此の俱胝和尚、金華山に住せし時、一尼あり實際と稱す。一日來り、笠子を脫せず錫を揮うて俱胝和尚を遶ること三回、(何等の無禮者ぞ。狂人か將亦痴人か。痴人に非ず狂人に非ず、所謂禪病に罹りし一種の變態心理者ならん。)面前に直立して曰く、道得ば笠子を下さん。如是三問、俱胝對なし。(俱胝和尚、元より愚に非ず。既に金華山に住す、蓋し相應の智者なるべし。然るに恁麽の問に逢着して一言半句の應酬なきは、思ふに此の事、即ち大道、眞理、禪旨に於て修行淺薄なるがためならん。誰か慚愧せざらんや。)尼便ち去る。俱胝和尚曰く、日勢稍々晩る、何ぞ一宿せざるや。(好言語、好消息、只恨むらくは遲きこと八刻。――)尼曰く、道得ば一宿せん。(鼻孔遼天、再來半文錢に當らず。)俱胝和尚默して曰く、我大丈夫の形を具すと雖も我に大丈夫の氣慨なし、――我に大丈夫の素質なし、――我に大丈夫の藝能なし、――我に大丈夫の心膽なし。――如かじ、此の金華山を捨つると共に一切の粉色を放下し、一意專心諸方に往き、大善知識に參禪せんものと熟慮果斷、――即時行脚出發の支度にかゝりぬ。(大丈夫の威氣茲に驀發す。可仰可敬、亦以て後世僞丈夫の好模範。――)其の夜、山神來り告げて曰く、此の地を去るを用ひず、肉身の菩薩來りて汝が爲に說法せん。――旬

をこえて果して天龍禪師來山。(天龍禪師は大梅禪師の嗣法者。)俱胝和尚、恭しく迎請して前事を陳述す。(聽くは一時の愧、聽かざるは末代の羞。此の人にして此の事あり、千載不磨の佳話と云ふべし。)天龍禪師、多端に渡らず唯一指を竪て是を示す。(此の一指、――――釋迦の拈華と異曲同工、――――相識滿天下、知心能幾人。――――)俱胝和尚、當下に大悟、此の何かを悟る。思ふ勿れ、天地一馬、萬物一指と。中に風露の香あり、知る人ぞ知る。俱胝和尚、果して風露の香を知りしか。是より學者の參問に會する毎に唯一指を擧するのみ、――――一切、他の提唱を用ひず。一指頭の禪は、俱胝和尚、動不動の處に向つて動じ、轉不轉の

處に向つて轉ぜられた賜である。』されど外來底に非ず、自家の珍なり。諸君、翫味したまへ。――――和尚に隨侍の童子あり。常に人の問ふ毎に必ず一指を竪て祇對す。(勸學院の雀は蒙求を語る、と。或は然らん。門前の小僧、習はずして經を讀む、と一般。人は須く居處を撰ばざるべからず。)人あり、俱胝和尚に問うて曰く、彼の童子も亦佛法を會すや。俱胝和尚、一日潛かに刀子を袖にして童子に問うて曰く、聞く汝佛法を會すと、是なりや。童子曰く、是。俱胝和尚曰く、如何是佛法。童子、指頭を竪起す。俱胝、刀を以て其の指を斷つ。童子、叫喚して走出す。俱胝、童子を召す。童子、首を回らす。俱胝曰く、如何是佛法。(玆が俱胝の活

作略。恁麽の活作略は此事を體得せし人に非ざれば能はず。）童子、手を擧して指頭を見ず。茲に於て豁然大悟す。（三尺の童子、既に大悟し去る。五尺の大人、大悟せざれば此童子に對して何の顏かある。寧ろ慚死すべし。）俱胝、順世に臨んで衆に謂ひて曰く、吾れ天龍禪師一指頭の禪を得て一生受用不盡、と。言ひ終つて示寂す。――古人云く、一得永得とは蓋し俱胝禪師の境界を云ひしならん。――「和尙」人天の師たる人の尊稱。――平易に云へば先生。先生とは、讀んで字の如く先に生るゝと云ふ單なる意味に非ず、先覺者と云ふこと。――「竪一指」、一指は人さし指、それを直立するのである。巨靈擡手無多子、分破華山千萬重。――之是の一指にて、釋迦如來五十年間、不說の說たる大說法を能く說破し得る。試みに說破し看よ、――竪一指。――

以上を總括して重說致します。龍は水を得る時意氣を添へ、虎は山に靠る處威獰を長ず。俱胝和尙未だ天龍禪師の一指を得ざる以前は之是らの人。纔に天龍禪師の一指を得て、龍の水を得るが如く虎の山に靠るに似て、其の威獰、可謂、凜々孤風不自誇、端居寰海定龍蛇。』――故實全師は、「千七百則の公案も俱胝の一指を出でぬ。只此の一指頭の禪、理解も道理も湊泊することは出來ぬ。」と賞讃して居らるゝ。俱胝和尙笑う

て舌を出さるゝか將亦一指頭を竪立さるゝか、諸君、忖度して見たまへ。』――無門禪師云く、俱胝並に童子の悟處、指頭上にあらず、と。然らば脚痕下にあるか、――無論指頭上にあることはある。要は自己と指頭と一串に穿却すべし。――經に曰く、唯有一乘法、無二亦無三。――聞かずや忠臣不仕二君、貞女不見兩夫。』――道は一つのみ、古今二路なし。一道の寒光威音却外。――「凡有所問、只竪一指」簡單明瞭。――撐天拄地、――充塞六合。――否、天地も一指頭の外ならず、六合も一指頭の内。否、否。「一指が天地、天地が一指。」「一指が六合、六合が一指。」此の處を王勃吟じて曰く、落霞與孤鶩齊飛、秋水共長天一色。――虛堂禪師は、老樹臥波寒影動、野烟浮草夕陽重、と云うて居らるゝ。――「如何なるか是れ佛。」と問うても指一本。「如何なるか是れ祖師西來意。」と問うても指一本、「如何なるか是れ非常時。」と問うても指一本。――俱胝和尚は指一本の和尚、指一本が俱胝和尚。――即今俱胝和尚ありや、――竪一指、ありり〳〵。昔の俱胝が今の我、今の我が昔の俱胝。今昔一貫、――彼此一體。――俱胝々々、――一指々々。――恁麼に落草談するものゝ眞箇の俱胝、――眞箇の一指頭、――見る能はず聞く能はず。――不遊三級浪、爭知禹門高。』――實參せよ、――實悟せよ。――

實參實悟の外、他に方便なし。――

◎頌

對揚深愛老俱胝、　宇宙空來更有誰、　曾向滄溟下浮木、　夜濤相共接盲龜、』

讀　方

對揚、深く愛す老俱胝。宇宙空じ來るに、更に誰か有らん。曾て滄溟に向つて浮木を下す、夜濤相共に盲龜を接す。』

「對揚」第十六則の頌に、對揚遭貶剝、とあります、それと同意味。茲では俱胝和尚の一指を竪てる、それが對揚である。德山禪師なれば三十棒、――臨濟禪師なれば一喝、――北條

時賴なれば、ア、ア、ア、の三笑、――衲なれば、お早う。

（衲は朝でも晩でも、人に逢着すれば何時でも、お早う。――）

「滄溟」大海のこと。古句に「父の恩は山より高し、母の恩は海より深し。父の恩に比すれば須彌山尚低し、母の恩に比すれば滄溟海尚淺し。」とある。又は性海にも禪海にも滄溟を用ひます。――「浮木盲龜」涅槃經にも雜阿含經にも法華經にも出て居ると云ふことであります。既に諸君の知り居らるゝ通り、廣大無邊の大海へ一本の浮木を投げた、海は廣くして浮木は小さい、――その小さい浮木に盲龜が遭遇すると云ふ譬喩。――千載の一遇とか優曇華の時とか云ふ意味であ

る。――「夜濤」夜中の大波浪。無明昏々たる闇夜、八萬四千の煩惱の大波小浪、震天動地、それに比す。――お互の胸中か、――或は然らん、――無論然り。――諸君御覽なさい。三世の諸佛、歷代の祖師、其の家風、其の主義、其の方便、其の機略、決して同じではありません。千紫萬紅、春蘭秋菊。元より下化衆生は赴感隨緣でありますから、其の時、其の處、其の人により區々別々、それが本當である。衲は俱胝和尚の應對ぶり、俱胝和尚の接化ぶり、俱胝和尚の爲人ぶり、如何にも簡單にして而して其の妙を得て居ることを腹の底から感服し且つ愛敬致します。――されど俱胝和尚を三十三天上まで押し上

げたは聊か雪竇禪師のお世辭。(俱胝和尚、曾て一箇の老比丘尼に、金輪水際、奈落のどん底まで蹴おとされたことを思ひ起せば。)とは云ふものゝ、唯一指で、佛とも法とも、今時とも那邊とも、大とも小とも、佛口蛇身とも神頭鬼面とも、――火にも水にも、山にも川にも、――清風明月にも、白雲流水にも、――殺にも活にも、與奪にも把放にも即時即處で圓轉滑脫するの妙用に到つては、あらゆる佛祖、總ての聖賢を一々點檢し來るに、未だ曾て俱胝和尚の如き對揚底をなす人あるなし。――雪竇禪師が、宇宙空來更有誰、と吟ぜられしは、吟じ得て當れり。云ひ得て妙。――如是に俱胝和尚を徹底的

に觀破したる者は雪竇禪師より外にあることなし。故に衲は、雪竇禪師が俱胝和尚を賛した、宇宙空來更有誰、と云ふ此の句を、そのまゝ水引を掛け換へて、雪竇禪師に奉呈致します。宇宙空來更有誰、』――――諸君、以て如何となすや。――――雪竇禪師、俱胝和尚を深く愛する心底から、更に其の意を強くして轉結二句に及ぶ。「曾向滄溟下浮木、夜濤相共接盲龜」浮木は佛祖の經文、公案。由來佛の佛たる所以、――――祖の祖たる所以は、――――爲人度生、下化衆生。それが本業であり、それが職務である。「久劫より今に至るまで、佛と祖と、樓頭知る、是れ幾聲の鐘ぞ。」と云ふ句がある。昔の昔より佛も祖師も、衆生長夜の醉

夢を覺醒せしめんが爲に、五千四十餘卷の警鐘、一千七百則の警鼓、それを叩きどうし、――――それを鳴らしどうし。――――諸君、佛祖の警鐘警鼓が耳に達しましたか。――――滄溟は生死の海。生れ生れの始めを知らず、死に死んで死の終りを知らず。彼れに生じ、此に死し、生死悠々。――――可謂、咄哉々々三界輪廻。――――諸君も衲も、浮いたり沈んだり、沈んだり浮いたりして居りながら、それを知らずに安閑として居ります。恁麼の滄溟海へ佛祖の浮木が下してある。――――佛祖の浮木は極めて微小、生死の海は至つて廣大、――――故に生死の海に溺れて居る衆生は容易に佛祖の浮木に遭遇することが出

來ぬ。(經に曰く、生れて佛に逢ふこと難し、佛に逢うて信念を起すこと難し、――人身は受け難し今既に受く、――一度人身を失すれば萬劫にも還らず、と。)佛祖の投下なされた浮木も、青天白日、波濤靜かなる時であれば、大なる苦勞も無く逢着することが或は出來る。然れども暗夜、特に風雨の甚だしき時、(何者が暗夜にした、誰が風雨を起した、お互だ。)しかも滄海の眞中へ、千佛萬祖のお世話やき連中が、難破船の人を救助するが如く、喪身失命を顧みず、手を換へ品を換へ慈悲三昧。されど、無明丸出しの亡者、煩惱結晶の盲龜は、なか〳〵濟度し易からず。――佛も是が爲に泣き、――祖も是が爲に苦勞をする。――然るに俱胝和尙は、滄海も浮木も盲龜も、正法も實相も妙心も、それ等のことには一切關せず、只一指を竪て、以て五千四十餘卷の經文ともなし、一千七百則の公案ともなす。而して其の妙、――其の効、――五千四十餘卷の經文以上、一千七百則の公案以上、――是れ一說。』――更に一說あり曰く、天龍禪師、一指の浮木を俱胝の滄海に下し、暗夜風濤の中に盲龜を接し得た。眼あきの俱胝をして到頭盲目になし終れり。』――由來禪宗では、是非とも父母所生の眼目を盲目にする、それが宗風である。少くとも一回、盲目になれば、一切の善惡、邪正、是非、得失、妄想、煩惱、悉く其のまゝ佛國土の

大莊嚴、――其のまゝ佛作佛行、祖言祖說。――然るに一回も盲目にならず、父母所生其のまゝの眼で總てを見て、是を愛したり、是を憎んだり、把つたり放つたりする。その樣なことでは、眞理も大道も禪も、見ることも聞くことも語ることも出來ません。――大內君云く、地獄の釜の下の火の光も極樂の彌陀の白毫の光も差別なきに至つて始めて、眞理、大道、禪、それを聞き且つ語る資格がある、と。味ふべきお辭であります。――俱胝和尙は、父母所生の眼目を天龍禪師の一指頭で突き破られ、眞箇の盲龜になりました。嗚呼盲龜、――嗚呼盲龜、――お互も盲龜となる修行、今方になしつゝある。――心頭を滅却すれば、父母所生の眼目のまゝ、眞箇の盲龜となれます。要は打成一片、――純一無雜。――純一無雜の力、打成一片の光、如何なるものも打破し、如何なる處も照破する。

――

序に打成一片、純一無雜につき、止啼兒の落草談を添へて置きます。禪學專門家、是は別として、普通のお人は、自己の本業、自己の本職、それに打成一片になるため、それに純一無雜になるため、注意し工夫を凝らす。それが大道、――それが眞理、――それが活禪の一部にして全部であります。茲に諸君が豫てより御承知の參考談があります。それは木戶孝允君の

片鱗。―― 維新三傑の一人木戸孝允君がまだ桂小五郎と名乗つて居る時代、江戸の劍客齋藤彌九郎の門弟として練兵館道場の塾頭をつとめた位であるから、無論劍の筋もよかつた。又、咽喉も器用であつた。若い頃であるから、暇つぶしに友人と音曲の稽古に通つた。聲もいゝ、節廻しもいゝ。上達が恐ろしく早いので師匠も驚いた。――「貴方の咽喉はまことに素性がいゝので、今一息で本職になれます。精々みつしりと御稽古をなされませ。」と師匠に云はるゝと、「左樣で御座るか。」――さう云つたきり小五郎君はその日から師匠の處へは通ひません。「桂氏、どうして此頃顏を出さぬか。」と同輩がたづねると、小五郎眞顏になつて開き直つた。「いや、どうも危い處であつた。俺は今一息で本職になれるさうな。――俺が音曲の稽古を始めたのは、貴殿も知らるゝ如く、遊び半分の仕事だ。然るに此の上うまくなつたなら、きつと俺は二本差した武士がいやになるかも知れぬ。今や天下頗る多事、俺達がみつしり働くのは是れからだ。こんな事に一生を誤つたら取り返しがつかぬ、と思うて一切思ひ切つたのぢや。」――遊藝に溺れようとした危い處で踏止まつた彼は、其の後一生涯、音曲のオの字も口へは出さなかつた、と。――流石は維新三傑の一人である。――武士が武士たる本業本職に打成一片、純一無雜になる、

それが眞箇の武士。――――云ひ換へれば、それが俱胝和尚の一指。――――大雅(畫家)は江戸に所用があつて、京からはる〴〵東海道を下つた事があつた。途中駿河の國にかゝり、生れて始めて富士の秀麗を眺め、忽ち恍惚として暫しは其の處を立去ることが出來なかつた。(富士は日本の一指。恍惚として立去る能はざるは大雅の心中の一指。)其の夜、彼は原宿の旅籠屋に宿を取つた。然し、彼が晝間仰ぎ見た富士の姿が心の中に一杯にひろがつて、どうしても眠ることが出來なかつた。――――さうなると、もう彼は筆を取つて描いて見たくて堪らなくなつた。普通の色紙や扇面では、彼の心に抱く富士の構圖が物足らなかつた。

――――ふと氣が付くと、部屋の隅に、まだ出來てから間もない白張りの屏風が立てゝあつた。――――これはいゝものがあつた、と早速主人に賴んで描かせて貰はうと思つたが、其の時彼の胸に躍る神興はもうそんなまだるいことを許さなかつた。いきなり筆を執ると、一氣呵成に屏風一面に富士の雄姿を描いた。――――我ながら實に見事に描いたものぢや、と思ひながら筆を措いて、――――これでやつと胸がすつきりしたわい、と漸く床に這入つたが、其の時氣がついたのは、宿の者に無斷で新しい屏風を汚した事だつた。子供のやうな氣持を持つてゐる大雅の事とて、その事が馬鹿に氣になり出した。(玆が大雅先生

の一指。）そこで彼は翌朝、夜明前に起きて、朝飯も食はず逃げるやうにして出發して了つた。宿の者が朝になつて大雅の泊つた部屋を掃除しようとして行つて見ると、買つたばかりの屏風に、べた〳〵墨が塗つてあるので、アツと驚いて了つた。（是れは旅籠屋の主人公、其の人の一指。）あの貧乏畫家の奴、道理で今朝馬鹿に早く出發したと思うた、と、其の客がまさか今天下に名高き池大雅とは知らぬから、宿の主人はすつかり憤慨して、こんなものは座敷に置けるものか、とばかり、下女に命じて行燈部屋に放り込んで了つた。――然るに、やがて此の屏風の富士が大雅の筆と云ふ事が知れて、或大名から此の宿の主人に使者が立つた。大金を以て買入れようとしたが、（是れは大名の一指。）もう其の時は宿の主人は、行燈部屋どころか床の間に飾つて燈明を上げてゐる位。故に大名の望みに頑として應じませんでした。（所謂、煩惱即菩提、前の一指と今の一指、一に多種あり二に兩般なし。）此の屏風は今に原宿の名物として大切にしてあるとのこと。』――大雅屏風の富士と本則の俱胝和尚の一指と、其の大を語れば天下能く載すること、なし、其の小を語れば天下能く破ること、なし。――即今お互が、古人の糟粕を喰はず、古人の足迹を踏まず、蓋天蓋地、獨立獨行の一指は、抑々如何。――斷而敢行鬼神避之。』――是は史記の李斯傳に

ある有名の語。心に堅く決斷して勇敢に所信を行へば、鬼神もこれを障碍する能はず、況んや其の他のものに於てをや。行く處、到る處、破竹の勢。溪磵豈能留得住、直歸大海作波濤。』――――一瀉千里、――――豈我を遮るアルプス山あらんや。――――處が前文に、狐疑猶豫すれば必ず後悔することあり、と。實に然り、狐疑猶豫はお互の辭書に措くべからず。暫時も忘却すべからざるは斷じて所信を勇敢に行ふにあり。――――之是が日本帝國の一指にして、日本九千萬國民の一指。――――之是が即宗教者曇華、一指頭の活動禪である。――――

茲に聯盟脱退の詔書を拜寫、以て日本帝國の活氣禪を共に拜體致しませう。

詔書

朕惟フニ曩ニ世界ノ平和克服シテ國際聯盟ノ成立スルヤ皇考之ヲ懌ヒテ帝國ノ參加ヲ命シタマヒ朕亦遺緒ヲ繼承シテ苟モ懈ラス前後十有三年其ノ協力ニ終始セリ

今次滿洲國ノ新興ニ當リ帝國ハ其ノ獨立ヲ尊重シ健全ナル發達ヲ促スヲ以テ東亞ノ禍根ヲ除キ世界ノ平和ヲ保ツノ基ナリト爲ス然ルニ不幸ニシテ聯盟ノ所見之ト背馳スルモノアリ朕乃チ政府ヲシテ愼重審議遂ニ聯盟ヲ離脱スルノ措置ヲ採ラシムルニ至レリ

然リト雖國際平和ノ確立ハ朕常ニ之ヲ冀求シテ止マス是ヲ以テ平和各般ノ企圖ハ向後亦協力シテ渝ルナシ今ヤ聯盟ト手ヲ分チ帝國ノ所信ニ是レ從フト雖固ヨリ東亞ニ偏シテ友邦ノ誼ヲ疎カニスルモノニアラス愈信ヲ國際ニ篤クシ大義ヲ宇内ニ顯揚スルハ夙夜朕カ念トスル所ナリ

方今列國ハ稀有ノ世變ニ際會シ帝國亦非常ノ時艱ニ遭遇ス是レ正ニ舉國振張ノ秋ナリ爾臣民克ク朕カ意ヲ體シ文武互ニ其ノ職分ニ恪循シ衆庶各其ノ業務ニ淬勵シ嚮フ所正ヲ履ミ行フ所中ヲ執リ協戮邁往以テ此ノ世局ニ處シ進ミテ皇祖考ノ聖猷ヲ翼成シ普ク人類ノ福祉ニ貢獻セムコトヲ期セヨ

御名　御璽

昭和八年三月二十七日

各大臣副署

以上、之是は日本大皇國、天皇陛下の一指。――之是の一指、古今に中外に、施して過らず、行うて悖らず、可謂、自然の大道、必然の眞理。――横按鎖鄉全正令大平寰宇斬痴頑。』

（昭和十二年四月十七日講演）

385
303

昭和十三年五月十九日印刷
昭和十三年五月二十四日發行

發行兼印刷者　佐々木四郎
東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社內

發行所　東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社考査課

終